

## 【おわりに】

以上述べたように、昭和51年度にスタートした石井方式漢字指導法は、だんだんと県下各地の学校に広がってきているが、この会に参加した先生たちが同じように口にするのは「子どものために」と思って参加したが、何より「自分のため」になったということである。

3年次の研究紀要の編集後記に私は次のように書いたことを思い出す。「また、この研究に取り組んでよかったという同人の皆さんの声を時々耳にする。近頃事ある毎にすぐ辞書を引くようになったという話をちょいちょい聞く。いってみれば、この研究は子供たちのための研究であると同時に、私たち自身の研究であったことに、今になってあらためて思い当たる(s 54. 3. 20)」

私たちがかつて感じたことを、参加して下さった先生一人ひとりが同じように感じて下さるということは、何とうれしいことであろうか。これはまた石井先生のお話がそれほどすばらしいということである。

実際、先生のお話は「漢字教室」といいながら、教育かくあるべしという教育観であったり、また人としての生き方にまで及ぶ魅力に富んだものである。

そして、また一方的に教師の努力精進を説かれるのではなく、むしろ

教師の教え過ぎを戒め、もっと横着して最少の努力で最大の効果をあげることを考えなさい。そのためにはもっと子どもの伸びる力、生きる力、生命力を信じなくてはならないと力説される話を聞いた直後に、明日からでもやってみようという意欲がわき、実践にも結びつくお話である。

かつて30年近くも子どもの練習効果にだけ頼るという情けない漢字指導しかしていない私であったが、石井勲先生に出会ったのは幸運であったと思う。今でも若い先生が、明治以来の旧態依然とした漢字指導をしかも営々として続けているのを見ると、せめてもの罪ほろぼしとして石井方式漢字指導法のすばらしさを紹介し実践をすすめたいと思う。